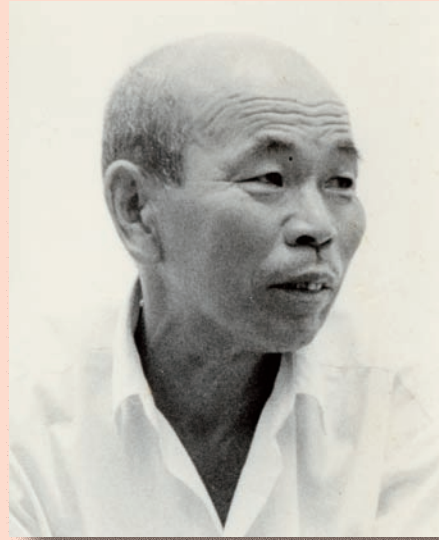


むねのまほろ
宗野真幌

柳井市
(1905～1986)



【著作】

詩集『紫巾』（昭和9・北方の詩社）
詩集『異本抄』（昭和31・柳井市文芸協会）
詩集『SATURDAY譚』（昭和47・こだま詩社）
ほか

詩人、宗野真幌に出会ったのは昭和五十一年（一九七六）四月であった。私が平郡島に赴任して十日位たった日、彼の調書を書く羽目になったのである。その二ヶ月前、海沿いの道でテラーを運転、後部に乗せていた奥さんもうとも海に転落したとのこと。これが私の初仕事であった。島では、「徳兄イ」と呼ばれており、「煙草作りの名人」でもあった。また雨天時、公民館の「囲碁会」にも参加していた。

彼は私の赴任を「島では詩のことを言っても誰もわかってくれないのであんたが来てくれて嬉しい。」と喜んでくれた。お互い『山口県詩選』に作品を発表していたからである。

彼は『詩の家』を発行、作品を発表していた佐藤惣之助について、「僕は佐藤惣之助の作品が好きだ。あんたも読みなさい。」と言って黄色い表紙の詩集を見せて貰ったことがある。あるいは彼を目標に書いていたのかと思わせる程、佐藤惣之助について語る彼の目は輝いていた。

宗野真幌は一時、結婚前に東京を放浪した旨書いているが、結婚後は平郡島にて農業に従事、後平郡島から離れることはなかった。離島で作品を書き上げることが彼の「発信」になっていたのではないだろうか。数多くの結社に作品を送っていたことからうかがえる。

作品はリアリズム傾向が強い。余りに自由なので、ある日「徳尾さんの作品は人を喰っている。」と言ったところ、えらく気にしたのか「文字は人を喰えない。」と言ったのを覚えている。

とは言え、新聞もテレビも見ず（多分、ラジオを聞いていた。）島で生涯にわたって書き続けた事、および、後もテラーに巻き込まれ大ケガをしながらも作業を続けたような「おつちよこちよい。」の面も持ち合わせた詩人であった。

（文・たむらのぶゆき）

【関連情報】

発表雑誌・・・『山口県詩選』『北方の詩』『詩帖』『秋葉』『論』『詩研究』『詩の家』『柳井短歌』『周東報道』『詩学』『オアシス』『詩園』『詩人街』『文学航路』『詩作品』『スパルタ』『記録』『こだま』『駱駝』『詩世紀』『中国詩集』等に発表している。

宗野真幌 年譜

（提供・たむらのぶゆき）

明治38（一九〇五年）	
昭和9（一九三四年）	二九歳
昭和13（一九三八）年	三三歳
昭和30（一九五五年）	五〇歳
昭和31（一九五六年）	五一歳
昭和37（一九六二年）	五七歳
昭和47（一九七二年）	六七歳
昭和53（一九七八）年	七三歳
昭和60（一九八五年）	八〇歳
昭和61（一九八六年）	八一歳

ハワイにて出生。本名 徳尾。少年の時に帰国。柳井市平郡島、（当時、大島郡）に永住。帰島後、農業（稲作、煙草）に従事、美祢の炭鉱に出稼ぎに行っていたこともある。詩集『牡軍鶏の虞』（発行所不明）発行。詩集『紫巾』（北方の詩社）発行。『山口県詩選』に『詩作品』『山口詩人』『秋葉』各誌に関係、寄稿と記載。詩集『悪色の鳥』（こだま詩社）発行。詩集『異本抄』（柳井市文芸協会）発行。第十三回山口県芸術文化振興奨励賞受賞。詩集『SATURDAY譚』（こだま詩社）発行。合同詩集『鼓海抄』（柳井現代詩の会）発行。他に吉本更生、つるはらまさたか、たむらのぶゆきが参加。小説『ビジュマジョル秘帖』（鳥影社）発行。死亡。

途 上 3

わかれ途
T字かY字かX字か
ベープのカーブか
陸のデルタか

さもありなんか
銀のつゞれのいでそよ風か
艶な車にのつてきた
森に縁故の新話題
森のコニイのスキヤンダル
ザボンの月は森の上
ペチャンコ車の亡骸は
森のカオスのあれでせふ

カオス 湖 ぎんぎらり
湖上遙かな網渡り
尖り帽子のピエロさん
軽い曲藝につい釣られ
キルクの船をこしらえた
なにさまこれでは軽すぎる

乙にからんだボエティック
錐もみ足もみすたこらと
あとに未練はある勿れ
森の外れの岐れ途

（詩集『悪色の鳥』（こだま詩社）より）

